

# 井高 1 号古墳

【所在地】 岐阜県加茂郡富加町井高  
【築造時期】 6世紀末～7世紀初め

**古墳の立地** 井高1号古墳は富加町指定史跡となっている。古墳の背後は丘陵に囲まれ、南へ広がる山裾に立地し、横穴式石室の開口部を南南西に向けて築造されている（図1）。古墳の裾部を古い街道（飛騨支路・飛騨街道）が東西に延び、その南側には水田地帯が広がる。古墳から南へ300m程には、古代に武儀郡と賀茂郡の郡境となった川浦川が流れている。さらに川浦川を越えた南側には大宝二年（702）の半布里戸籍と関連する東山浦遺跡があり、6世紀から集落を形成している。井高1号墳を取り囲む丘陵の西端にある白山神社の境内には、過去に3基の横穴式石室が確認されたようであるが、現在は若干の盛土と石材が確認できるだけで、大規模な群集墳は見当たらない。

**墳丘の特徴** 井高1号古墳は、南南西に開口する横穴式石室が構築された方墳<sup>ほうふん</sup>と考えられる。石室の開口方向つまり石室の主軸が西側の丘陵とほぼ平行しており、丘陵を意識して築造されたかのようなのである。南東コーナは道路の敷設によって大きく削平を受けている。この部分には川原石円礫を使った葺石が露呈したこともある。東・西・北面の墳裾も一部削

られているが、盛土が残存する部分から墳形や規模を知ることができる。石室の開口部から南へ3m程で傾斜がぐっと落ち込み道路側溝に至る。これを墳裾前面の傾斜と捉え、東・西・北側面の残存盛土のラインと結ぶと、ほぼ一辺25mの正方形となる。これを当該古墳の規模と想定する（図2）。

墳丘<sup>ふんきゅう</sup>は、標高75.4m付近でわずかに傾斜が緩やかになる。このラインは石室開口部の前面にある平坦部とも高さが揃ってくる。これがテラスの平坦面と考えられるため、二段築成<sup>ちくせい</sup>と考えた。墳頂部は南北に僅かに長いほぼ正方形の平坦面を形成し、標高は79.2mである。墳丘最下段の標高は約74mと想定できるので、墳丘の高さは約5.2mとなる。墳丘上段の規模は東西17.3m、南北16.4mで高さは約4.7mとなり、墳丘下段の高さは約1.5mと推定できる。



図1 井高1号古墳位置図



墳丘と石室開口部（南から）

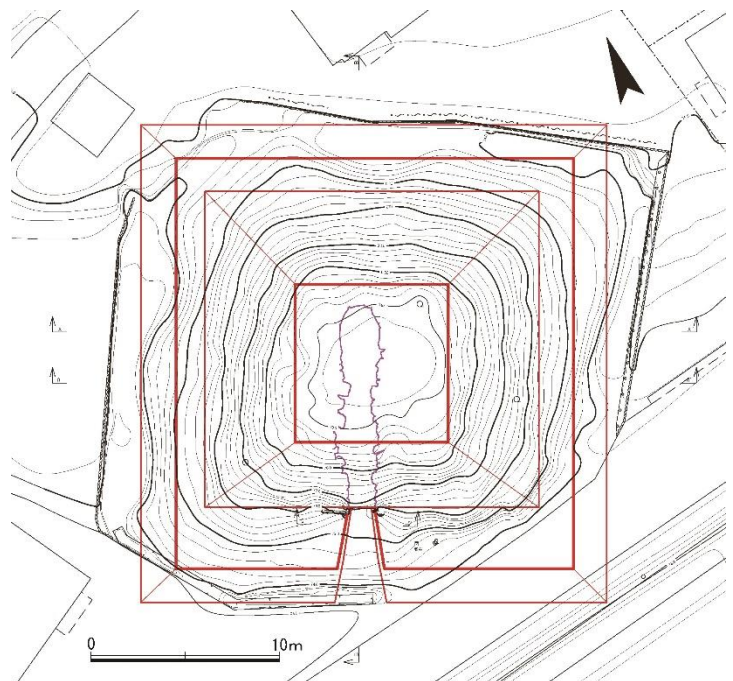


図2 井高1号古墳推定墳丘復元図 (S=1/400)

横穴式石室の開口部が南辺に設けられているが、石室の位置は、墳丘の中心軸よりやや西へ偏っている。石室の開口部の前面には平坦面が形成され、墳丘の南辺裾部まで約5mの距離がある。また、開口部の西側の墳丘が前に迫り出してテラス平坦面部と繋がる。こうした現況から考えて、本来は開口部の前面に前庭部ぜんていぶが設けられていたと想定する。前庭部の長さは約3mを想定しておく。

**内部主体** 内部主体は横穴式石室である。坂祝町の火塚古墳と同じように火の玉を避けるために横穴式石室の中に避難したという伝承があり、通称「滝田の火塚」と呼ばれている。

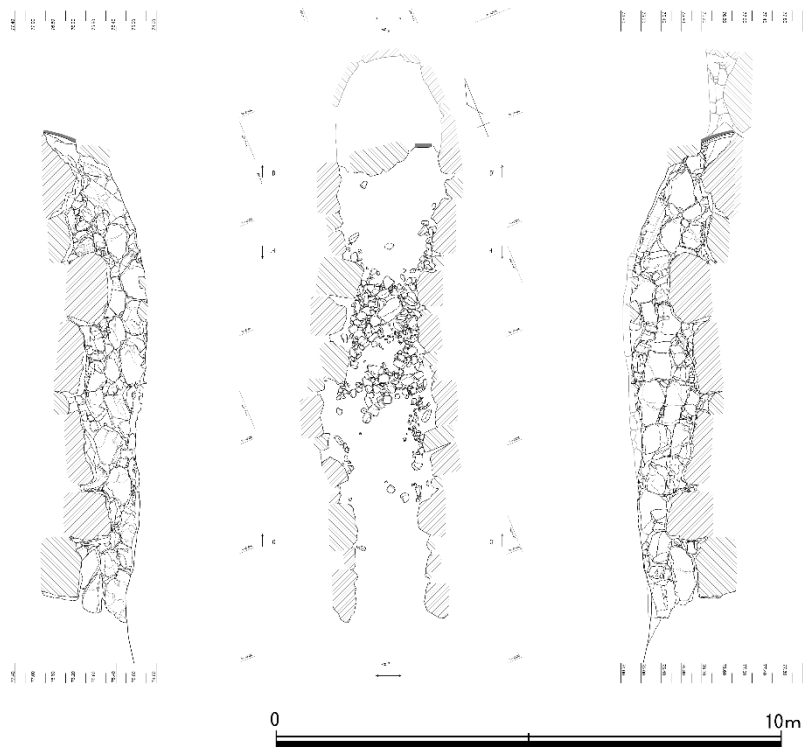


図3 井高1号古墳横穴式石室実測図 (S=1/150)

現在は奥壁上部あたりから流出した土砂で、玄室の最奥部が埋まっているため、昭和30年代中頃に作成された実測図（堀田ほか1961）で補いながら石室図面を作成した（図3）。昭和30年代の実測図にも落石（天井石の落石と記されている）が描かれているため、そこから土砂が流れ込んだのだろう。現在はコンクリートブロックで土留め補強されている。

石室は南南西に開口し、げんしつ玄室は複室構造となっている。後室は長さ4.9m、幅は1.7~2.1m、前室は長さ4.7m、幅は1.4~2.2m、羨道は長さ1.7m、幅1.3mとなり、石室長（玄室+羨道）は11.3mとなる（図3）。前庭部を含めると石室の全長は14.3m程になる。玄室の平面形は胸張りそくへきで、側壁はやや大きめのチャート石を4段ほど積み上げる。げんもん玄門の袖石を内側に突出させて疑似両袖にしている。奥壁は埋もれて全体が分からないが、過去の記録から巨石を用いるようである。天井の断面形は孤状となり、玄門の天井石が一段下がるまぐさいし楕石構造となる。せんどう羨道は直線的で短く、玄室よりやや幅を縮める。現状では前庭部の側面に石積らしきものは認めないが、埋没しているか、後世に何らかの改変を受けている可能性もあり、羨道を含め一部損壊している可能性を考えておく必要がある。

**古墳の評価** 今回の測量調査によって井高1号古墳が一辺25mの方墳であり、前庭部を伴う可能性が高まった。中濃においては火塚古墳（坂祝町）、次郎兵衛塚1号墳（可児市）に次ぐ大型方墳であり、墳形や前庭部のあり方は火塚古墳に似る。石室はいわゆる三河型横穴式石室の影響を受けたもので以前より次郎兵衛塚1号墳との関係が指摘されるが、複室の前・後室がほぼ同規模な特徴は、やや新しい要素であろうか。築造時期は6世紀末から7世紀初め頃と考えておく。

【参考文献】 堀田啓一・久野邦雄 1961「美濃—半布里戸籍地帯」『古代学研究 特集後期古墳の研究』第30号